

# 大型商業施設に隣接する中心商店街歩行者の回遊行動 —福岡市博多区「川端通商店街」を事例に—

中西 悠<sup>1</sup>・小村香薫<sup>2</sup>・坂真太郎<sup>2</sup>・古田竜太郎<sup>2</sup>・炭本大樹<sup>2</sup>・

(<sup>1</sup>愛知教育大学・院, <sup>2</sup>愛知教育大学・学)

I はじめに	IV おわりに
II 対象地域の概観	
III 川端通商店街歩行者の回遊行動	

キーワード：中心商店街，大型商業施設，回遊行動，川端通商店街，福岡市博多区

## I はじめに

近年，日本各地の郊外に大型商業施設（以下，大型店）が登場し，それらに利用客の大部分を奪われた中心商店街の衰退が顕著となっている。たとえば，名古屋市熱田区の神宮前商店街では，大型店が outlet したことなどによって空き店舗が増加し，シャッター通りとなっている様子がみられる。こうした中心商店街では，

おおむね店主の高齢化による後継者不足も問題視されている。

その背景には，2000年に施行された「大規模小売店舗立地法」（以下，大店立地法）による大型店出店の規制緩和の影響や，都市住民の居住地そのものの郊外化が指摘されてきた。大店立地法による規制緩和は，中心市街地の空洞化を招き，商店街周辺の治安の悪化や地域コミュニティの荒廃など様々な問題を引き起こしている。

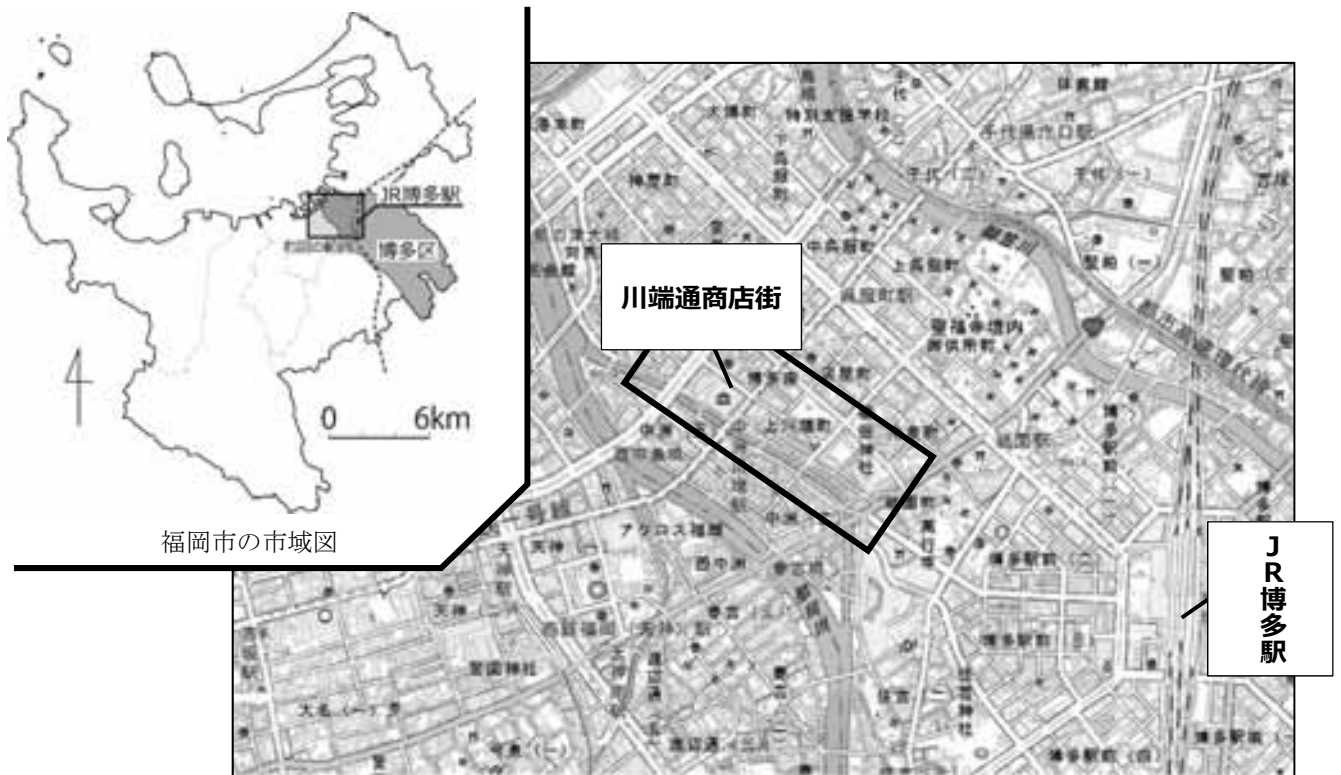


図1 対象地域の概観図

(国土地理院電子国土 Web をもとに作成)

一方で、中心商店街衰退の原因としては、商店街自体の魅力が欠如しているという点も大きい。中心商店街と大型店を比べた時に、商店街に魅力が無ければ、消費者は品ぞろえやサービスなどで圧倒する大型店を利用するだろう。そのため、中心商店街は消費者をもっと惹きつける魅力を持ち、来街者を商店街振興につなげる必要がある。

そこで本研究では、中心商店街の一事例として、福岡市博多区に位置する川端通商店街を取り上げる（図1）。当該商店街は、後述するように周囲に複数の大型店が隣接しているにもかかわらず、他地域の商店街一般とは違ってそれほどの衰退がみられない。少し古いデータではあるが、2000年代初頭の同商店街の1日の平均通行客数は平日で約12,000人、週末・祝祭日で約25,000人と、多くの歩行者で賑わっているのである（岡田 2003）。

本研究は、その理由を川端通商店街と周辺大型店とのあいだで共存が成立しているためであると仮説を立てた。というのも、千葉（2009）やBI（2002）が報告するように、周辺地域への大型店の進出によって中心商店街にも人が増え、互いに競争し合いながらも共存する事例があるからである。反対に、大型店の進出によって増えた商店街歩行者の多くが、商店街を直接利用するわけではなく、大型店に向かう際に通行しているにすぎないという指摘もあり（根田 1989；香川 1987）、対象事例によって大きな地域差があるものと予想される。

しかし、本研究の対象地域である川端通商店街において、周辺大型店と中心商店街との共存関係に着目しながら、商店街歩行者の回遊行動を調査した例はみられない。そこで本研究の目的は、川端通商店街歩行者に対する対面調査にもとづいて人々の回遊行動パターンを類型化し、商店街の利用状況を明らかにすることとしたい。本研究の成果は、大型店の進出によって衰退が進行している中心商店街の集客増を検討する際、ある程度役に立つ基礎資料になりうるものと考えられる。

なお本研究では、川端通商店街において以下の流れで調査研究を行った。

- ①中心商店街と大型店の共存や歩行者について書かれた資料・文献を収集し、現状を把握する。
- ②商店街振興組合に聞き取り調査を行う。
- ③商店街歩行者に対して対面調査を行い、歩行者の回遊行動のパターンを分析する。
- ④以上の結果から事例の商店街が周辺大型店と共存し

ている要因を明らかにする。

## II 対象地域の概観

### 1. 川端通商店街の概要

川端通商店街は、福岡市博多区と中央区を隔てて流れる那珂川・博多川の東岸に立地し、九州地方最大の歓楽街である中洲にも隣接する老舗の中心商店街である（図1）。商店街振興組合は、商店街を横切る冷泉公園通り南側の上川端商店街振興組合と、北側の川端中央商店街振興組合の2つに分かれている。本研究では、これらを総称して「川端通商店街」と呼ぶことにする。

図2で示すように、川端通商店街は博多川沿いに北西から南東にかけておよそ400mの長さがあり、アーケードの下には100軒以上の店舗が並んでいる（図3）。商店街は、南端のキャナルシティ博多（1996年4月20日オープン）<sup>1)</sup>と北端の博多リバレイ（1999年3月6日オープン）<sup>2)</sup>の2つの大型店によって挟まれたかたちとなっている。

川端通商店街は「博多祇園山笠」と呼ばれる祭りに



図2 川端通商店街の歩行者がよく訪れていた店舗  
（上川端商店街振興組合ホームページ<sup>4)</sup>をもとに作成）



図3 川端通商店街の外観  
(2016年2月23日, 阿部亮吾氏撮影)

参加したり、振興組合がホームページ<sup>3)</sup>を作って商店街の魅力をアピールしたりと、広報活動や観光に特に力を入れている。また、消費者にもっと商店街を利用してもらうために、西隣にある中州地区からくる若者をターゲットにした店舗を増やすなどの工夫が多々みられる。岡田(2003)は、とりわけ商店街による「祭りへの参加」(Cultural Engagement)が商店主間の日常的な結束や連携(社会資本)を強め、1990年代に上記大型店が出店した際にも、いち早く共存共栄の道を模索する動きが現れたと評価している。

## 2. 川端通商店街の現状と課題

筆者らは、2016年3月15日午前10時から上川端商店街振興組合に聞き取り調査を行った。同組合は1971年に設立され、現在は約100名の組合員から構成されている。組合への参加は任意である。後継者不足などが原因となって貸店舗が増えており、貸店舗を通じて商店街に出店している人は組合に参加しない傾向が強いという。また、チェーン店のなかには会社の規則で組合に参加できないこともある。組合は現在、集客のための工夫として、照明のLED化やイベントや季節によって垂れ幕を変えるなどしている。また、地元の店舗だけでなく九州の他県や、韓国などからの出店を増加させることで商店街の魅力を向上させている。こうした取り組みによって、中高年が満足できるようなこだわりのお店が増えたそうである。

川端通商店街は、第二次世界大戦の戦災によって店舗の一部が中央区天神地区の新天町へと移動し、復興後に上川端商店街に戻った店舗と新天町商店街で出店し続けた店舗とに別れることとなった。ただし、2つの商店街を掛け持ちしている店舗は存在しない。

一方、キャナルシティ博多や博多リバレインなど大型店との共存について尋ねると、店舗構成それ自体での対策を特に考えているわけではないという。しかし、大型店には生鮮食品の売り場がなく、商店街内には生鮮食品売り場がいくつか存在している。これは両者の共存を目指した策ではなく、それぞれ独自の方針であるということだった<sup>5)</sup>。他方、組合は近隣の大型店でも使用可能な商品券を発行したり、大型店のイベントを商店街内でも行ったりしている。また、商店街からキャナルシティ博多への連絡橋が設けられており、店舗構成以外の部分では共存に向けた取り組みがなされているといえる。

将来的な課題としては後継者不足が挙げられた。商店街の後継者が不足すると、イベントの運営が困難になり、集客に影響を及ぼしかねない。また、施設の老朽化が進み、商店街を覆っているアーケードの維持も厳しい現状があるということだった。

以上のように、全国の商店街に共通する課題を抱えつつも、川端通商店街では両端の大型店と一定程度の共存共栄が図られていることが分かった。しかしながら、商店街内の歩行者が、商店街店舗と大型店において実際にどのような回遊行動をとっているのかということは明らかにされていない。そこに本研究の意義がある。

## Ⅲ 川端通商店街歩行者の回遊行動

### 1. アンケート調査の方法

本研究では、商店街歩行者の回遊行動を把握することを目的に対面調査を行った(表1)。対面調査は2016年3月15日(火)の12~17時のあいだ、商店街の出入りに筆者らが分かれて立つことで行われた。

表1 調査内容

調査日	2016年3月15日 12~17時
対象者	商店街歩行者
対象地域	川端通商店街
調査方法	調査者は、商店街の両端に向き合うように立ち、それぞれの側から出て行こうとする人に対して声をかけ、対面調査を行う。
サンプル数	64

### 2. クラスタ分析による商店街歩行者の類型化

次に、対面調査によって明らかになった商店街歩行者の回遊行動を、クラスタ分析(ワード法、ユークリッド距離)によって類型化した。なお、分析には

商店街を素通りした 21 サンプルを除く 43 サンプルを用いた。これらをクラスター分析した結果、以下の 4 類型に分類することができた（図 4）。各類型の特徴を表 2 に、それぞれの類型の実際の回遊行動パターンを図 5-1 と図 5-2 に示した。

まず A 型に属するサンプルは、キャナルシティ側から入ってリバレイン側に抜けていくあいだに、商店街内の店舗に立ち寄っていた。A 型の立ち寄った店舗は、飲食店やこだわりの野菜を売る専門店などである。また、A 型の来街頻度と年齢層の関係を調べると（表 3）、商店街に初めて訪れた 20 代以下の層と、年間に複数回訪れる 60 代以上の層が多くみられた。前者は観光客であり、居住地も福岡市外や県外であった。

次に B 型に属するサンプルは、キャナルシティ側から商店街に入ってキャナルシティ側に戻りながら抜けていくあいだで店舗に立ち寄っていた。立ち寄った店舗は、飲食店やこだわりの野菜を売る専門店、老舗の靴店などである。また、表 4 に示すように、B 型の来街頻度と年齢層をみたところ、各年代がまんべんなく訪れていたことが分かった。来街頻度については、20

表 3 A 型来街者と年齢層

年代層 頻度	～20歳代	30～50歳代	60歳代～	計
週1回以上	1	1	2	4
月1回以上	1	0	2	3
年1回以上	0	0	4	4
初	5	0	0	5
計	7	1	8	16 <sup>*</sup>

※1つのサンプルは、未回答のため除外

（対面調査より作成）

歳代以下の層が初来街者であり、30 歳代以上の層は年間複数回訪れる人である。

次に、C 型に属するサンプルは、国体道路や冷泉公園など、商店街の東側から商店街に入り、キャナルシティ側に抜けていくパターンである。立ち寄った店舗は老舗の専門店や美容店、100 円均一のチェーン店などであった。C 型は 30 代～50 代と 60 代以上の割合が高く、そのすべてが 1 年間に複数回商店街を訪れていた（表 5）。また、30 代～50 代と 60 代以上の居住地の 88%が福岡市内であった。C 型はメインストリート以外の所から商店街に入ってきているため、地元の人が

表 2 各類型の特徴

類型	傾向（サンプル数）
A	キャナルシティ側から商店街に入り商店街内を散策し、リバレイン側に出て行く。（17）
B	キャナルシティ側から商店街に入り商店街内を散策し、再びキャナルシティ側に戻り出て行く。（7）
C	国体道路や冷泉公園などから入ってキャナルシティ側に出て行く。（10）
D	その他（中州川端駅などから入るパターン）（9）

（対面調査より作成）

表 4 B 型来街者と年齢層

年代層 頻度	～20歳代	30～50歳代	60歳代～	計
週1回以上	0	1	2	3
月1回以上	0	1	0	1
年1回以上	0	0	1	1
初	2	0	0	2
計	2	2	3	7

（対面調査より作成）

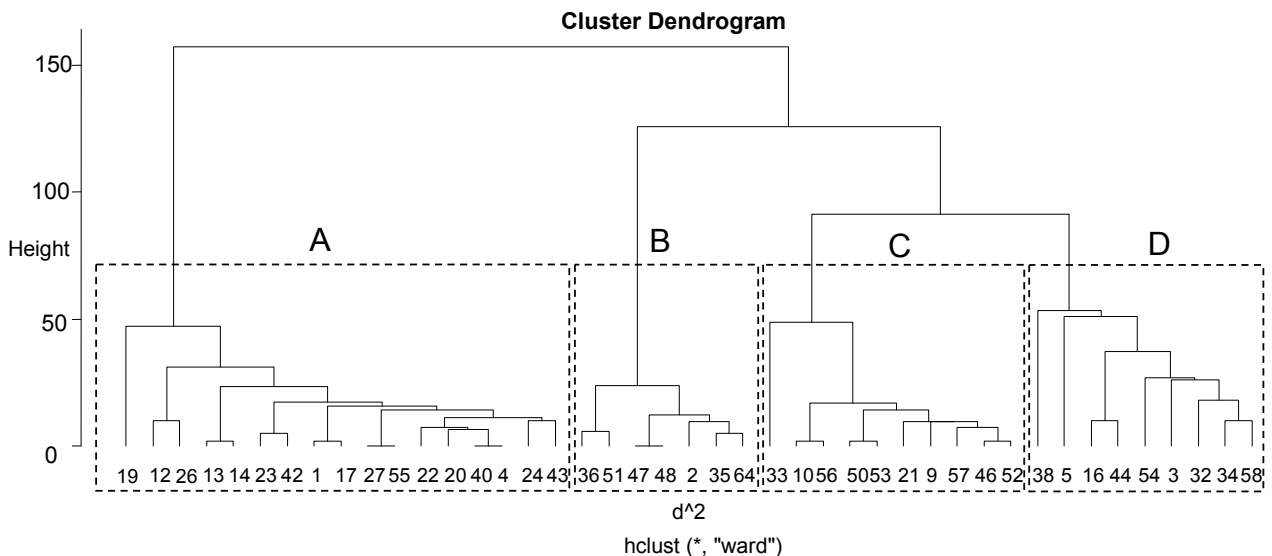


図 4 クラスター分析の結果

（対面調査より作成）

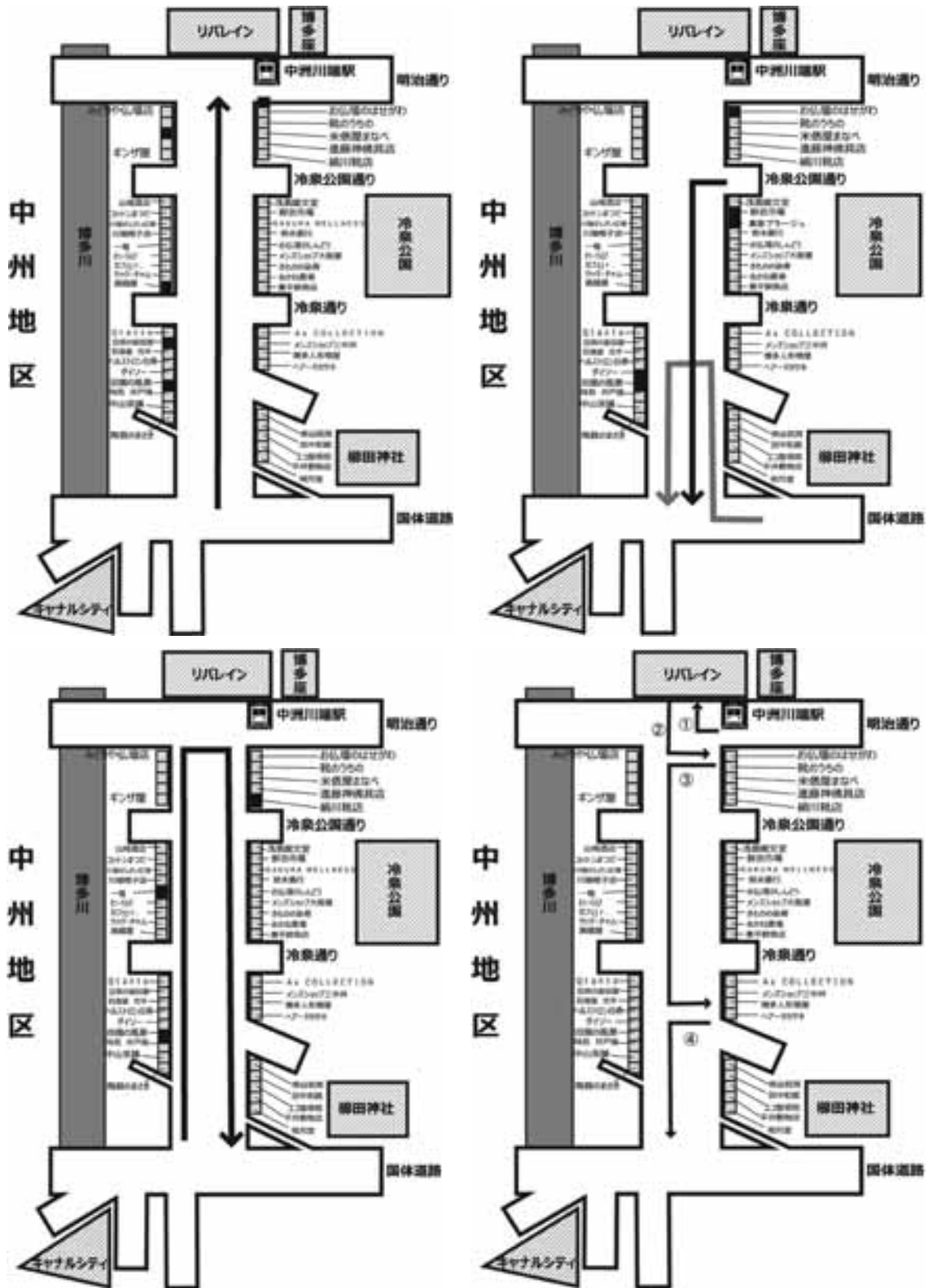


図 5-1 商店街歩行者の回遊行動パターン (左上 A 型, 左下 B 型, 右上 C 型, 右下 D1 型)

(対面調査より作成)

中心であると推察された。そのため、立ち寄った店舗も老舗の専門店や美容店といった地元住民が利用する店舗が多かったのではないだろうか。

最後の D 型に属するサンプルは、それぞれの回遊行動が不規則であったものの、特徴的な 2 つのサンプル

を図 5-1 と図 5-2 に示した。パターン D1 は、①中洲川端駅からリバレイン～②老舗仏壇店～③老舗人形店を経て、最後は④キャナルシティ側に抜けていた。一方のパターン D2 は、①リバレイン側から老舗仏壇店～②老舗靴店～③老舗仏壇店～④こだわりの野菜を売る

表5 C型来街者と年齢層

年代層	～20歳代	30～50歳代	60歳代～	計
週1回以上	0	2	1	3
月1回以上	0	1	2	3
年1回以上	0	0	1	1
初	2	1	0	3
計	2	4	4	10

(対面調査より作成)

表6 D型来街者と年齢層

年代層	～20歳代	30～50歳代	60歳代～	計
週1回以上	1	1	4	6
月1回以上	0	0	1	1
年1回以上	0	0	2	2
初	0	0	0	0
計	1	1	7	9

(対面調査より作成)



図5-2 商店街歩行者の回遊行動パターン（D2型）

(対面調査より作成)

専門店を経て、⑤再びリバレイン側から商店街を出た。D型の来街頻度と年齢層をみると、どの年代においても初めて商店街を訪れたという人はいなかった(表6)。また、週に1回以上商店街を訪れる人の割合が4類型のなかで最も高かった。このことから、D型に属するサンプルには土地勘があり、日常的に商店街を訪れている層であるがゆえに、歩行者行動に複雑な回遊性が見られたものと推察された。

3. 大型店との関係

最後に、商店街と大型店との関係性を考察したい。図6に示すように、大型店の利用頻度は、A型とB型で年1回以上がそれぞれ44%と57%、C型とD型については月1回以上がそれぞれ40%と44%と最大であった。また、川端通商店街への来街頻度と大型店利用頻

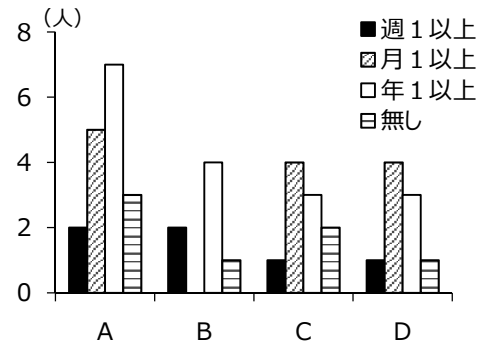


図6 大型店の利用頻度

(対面調査より作成)

表7 来街頻度と大型店利用頻度間の相関係数

A型	0.351
B型	0.895
C型	0.51
D型	-0.101
全体	0.468

度間の相関関係を調べたところ(表7)、B型で非常に強い正の相関( $r=0.895$ )が、C型でやや強い正の相関( $r=0.510$ )がみられた。なお、46サンプルの相関係数の平均は0.468とやや強い正の相関であった。このことから、商店街に良く訪れる人ほど大型店にも訪れており、なかでもB・C型では強くその傾向が表れることが明らかとなった。

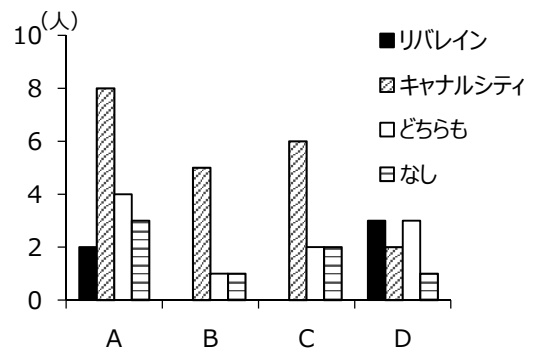


図7 どちらの大型店をよく訪れるか

(対面調査より作成)

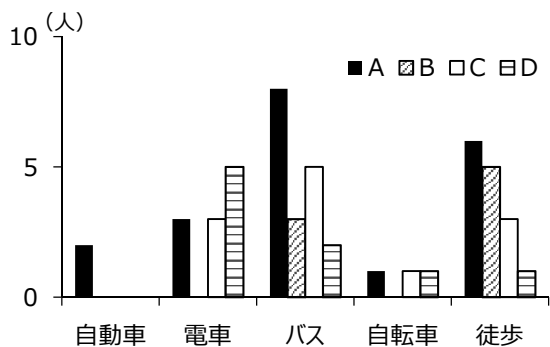


図8 商店街への交通手段

(対面調査より作成)

また、図7に示すように、A・B・C型はキャナルシティの方を最もよく訪れており、それぞれ50%・71%・60%となった。さらに、類型別に商店街への交通手段をみると、A型とC型はバスがそれぞれ56%と50%で最大であった。一方、B型は徒歩が71%、D型は電車が56%でそれぞれ最大であった(図8)。

#### IV おわりに

本研究では、以上のとおり川端通商店街歩行者に対面調査を行った結果、商店街歩行者の特徴として以下①～⑥のことが明らかとなった。

- ①川端通商店街歩行者の回遊行動はA～Dの4パターンに類型化できた。いずれの型も、20代以下(おそらく観光目的)の初来訪者を除けば、中高年層を中心とした地元住民の行動パターンと推察される。
- ②A型(17サンプル)は徒歩かバスで商店街まで来て、キャナルシティからリバレインへと抜けながら店舗間を回遊する行動パターンであった。それにもかかわらず、入り口側のキャナルシティに比べて、出口側のリバレインの利用頻度はやや少なかった。
- ③B型(7サンプル)はA型と同じく徒歩やバスで来て、キャナルシティ側から入ってまたキャナルシティ側に戻りながら回遊するパターンである。そのため、キャナルシティの施設利用頻度が高いうえに、商店街への来街頻度が多い人ほどキャナルシティの利用頻度も高くなるという相関関係が強くみられた。
- ④C型(10サンプル)もやはり徒歩やバス(一部電車)が交通手段の中心であり、商店街の東側からやって来てキャナルシティ側へと抜ける回遊行動であった。その結果、B型と同じくキャナルシティの利用頻度が圧倒的に高く、B型ほどではないがその頻度も来

街頻度にある程度左右されている。

- ⑤D型(9サンプル)は電車でやって来て、中洲川端駅やリバレイン側から商店街に入り、やや不規則な回遊行動をみせつつ両側へと抜けていくパターンであった。そのため、隣接大型店のうちキャナルシティとリバレインのどちらもが同程度に利用されている。ただしD型の場合、来街頻度と大型店利用頻度の相関が最も低いという特徴が出た。
- ⑥以上の歩行者回遊行動調査から、川端通商店街との共存関係がよくみられたのはキャナルシティの利用者であることが明らかとなった。そのため、今後は商店街歩行者をリバレインへと導くような策が必要となるとはいえないだろうか。ただし、歩行者の15%ほどは商店街内の店舗にまったく立ち寄りせず、通り抜けるだけであったことから、そのような歩行者の割合を減らすことも大きな課題となる。

以上のような調査結果が得られた一方で、次のような課題も残った。まず、アンケート調査を行った期間が1日しかなかった点である。また、今回の調査では平日昼間の時間帯でしか調査を行うことが出来なかったため、曜日や時間帯、季節等の違いが調査結果には反映されていない。その結果、サンプル数も64と、歩行者の回遊行動パターンの全体像を把握するほどの数を得ることが出来ておらず、分析に偏りが生じている可能性は否定できない。その点を克服するには、可能な限り調査期間を長くする必要がある。

また今回の対面調査では、筆者らの用意した商店街の略図に歩行者自身が回遊行動を描画するといった方法をとったが、筆者らの説明不足か、あるいは用意した略図が分かりにくかったのか、分析不能な回答が複数みられたことは残念であった。調査方法の再検討も含めて他日に期したい。

#### 謝辞

本研究の調査にあたり、商店街歩行者の皆さまを含めて多くの方々にご協力をいただきました。とりわけ、お忙しいところ聞き取り調査に応じてくださり、また商店街での対面調査に温かく許可をいただいた川端通商店街振興組合の方々にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

#### 注

- 1) キャナルシティ博多 (<http://canalcity.co.jp/>) (最終閲覧日: 2015年12月10日) を参照。

- 2) 博多リバレイン (<http://riverain.co.jp/>) (最終閲覧日：2015年12月10日) を参照。
- 3) 上川端商店街振興組合 (<http://www.hakata.or.jp/>) (最終閲覧日：2016年8月1日) を参照。
- 4) 前掲3) を参照。
- 5) 岡田 (2003:29) には、キャナルシティ博多が出店する際、上川端商店街振興組合側が「業種として競合しないように、遊びの要素を取り入れた複合商業施設の建設をキャナルシティ側に要請した。その結果、キャナルシティには大型スーパーなどは入居せず、映画館やレストラン、宿泊施設などのアミューズメント機能を備えた複合施設となった」とあり、筆者らの聞き取り調査内容と合致していない点には注意が必要である。

## 文 献

- 安藤靖華 2007. 商店街衰退のリスクからその再生を考える. 香川大学経済政策研究 3.
- 岡田康宏 2003. 地域活性化に向けた市民による文化資源への関わり—社会資本醸成要素としての Cultural Engagement—. 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 2002 年度修士論文.
- 香川勝俊 1987. 小都市における大型店立地の地域商業への影響. 人文地理 3-39 : 216-233.
- 杉村暢二 1972. 歩行者通行量による中心商店街の性格—ショッピング・センターの類型に関連して—. 地理学評論 45-4 : 283-296.
- 千葉昭彦 2009. 大型店進出に伴う消費者行動の変化—宮城県南部地域—. 東北学院大学経済学論集 169 : 53-82.
- 根田克彦 1989. 大規模小売店の立地を契機とする周辺商業地の変化—釧路市新橋大通商店街を例に—. 東北地理 41 : 148-159.
- BI Taotao 2002. 広域型商店街における大型店舗と中小小売商の共存共栄—「アメ横」商店街の事例研究—. 流通研究 5-1 : 1-26.